

大学生の学習に対する無気力及び危機感に影響を与える要因の検討

相馬 亜衣¹ 伊藤 翼¹ 内山 和希¹ 村上 浩将¹ 泉水 紀彦²

本研究では、学習への無気力状態に基づいてカテゴリー化するため、学習への無気力状態と現状に対する危機感を測定できる尺度を新たに作成し、各カテゴリーがどのような要因と関連するかを検討することを目的とした。268名の大学生を対象に質問紙調査を実施し、探索的因子分析を実施した。その結果、無気力感尺度25項目について、「学習意欲の低さ」、「危機感」、「無関心傾向」の3因子が抽出された。無気力状態のカテゴリー化については、学習意欲が高く、危機感が平均的で、無関心傾向が低い「中間群」、学習意欲が低く、危機感が高く、無関心傾向が平均的である「無気力自覚群」、学習意欲が低く、危機感が平均的で、無関心傾向が高い「無関心群」、学習意欲が高く、危機感と無関心傾向が低い「低無気力群」の4群に分類された。4群の中で、「無気力自覚群」と「無関心群」では、「無気力自覚群」は「無関心群」よりも「危機感」が有意に高く、「無関心傾向」が有意に低かった。アバシー心理性格尺度の各カテゴリー間の分散分析による比較では、全ての下位尺度で「無気力自覚群」と「無関心群」は他の2群より高かった。また、特性的自己効力感では、「無気力自覚群」と「無関心群」は他の2群より有意に低かった。学習動機づけ尺度については、「同一化的調整」と「内発的調整」において、「無気力自覚群」と「無関心群」は他の2群より低く、「外的調整」において、有意に高かった。また、「内発的調整」においては、「無関心群」が「無気力自覚群」よりも有意に高かった。これらの結果から、「無気力自覚群」と「無関心群」はアバシー傾向が高いことが分かった。自己効力感の低さは学生の無気力状態の一つの要因であること、動機づけの自律性は学習意欲の低さに影響を与える要因であることが考えられる。また、「無気力自覚群」と「無関心群」の差異は、自身の無気力への認知と内発的動機づけの程度にあると推測される。

キーワード：学業面の無気力、スチューデント・アバシー、危機感、動機づけ

問題と目的

大学の入学希望者総数が入学定員総数を下回り、大学や学部を選ばなければ計算上誰もが大学に入学することができるという、大学全入時代を迎えて久しい。このような環境で、学習意欲に乏しい学生が大学に入学し、遊びにかまけて勉強しないという状況が「大学のレジャーランド化」と批判されている(下山, 1995)。また、大学が高い就職率を標榜し、学生を獲得するために「就職予備校」「資格予備校」と化していることも問題となるなど、専門的な学問の教育機関という大学の本来的なあり方が揺らいでいる。このような問題の背景には、大学生の無気力状態が関連していると考えられ、スチューデント・アバシーなどと併せて研究がなされてきた(下山, 1996)。

大学生の無気力に関する先行研究では、抑うつや無感情化と関連する無気力状態と、学業からの選択的退却であるスチューデント・アバシー的な意欲低下状態は区別して捉えるべきだと考えられている(狩野・津川, 2011)。狩野・津川(2011)は、抑うつ的な状況

に置かれたときに分析的・否定的に考え込む傾向が高いほど抑うつ的な無気力に陥りやすく、分析的・否定的に考え込む傾向が低いほどスチューデント・アバシー的な無気力状態に陥りやすいとして両者を区別した。また、大西(2016)は、病的な状態とは異なり、無気力状態にあってもそれが狭い範囲にとどまり、アイデンティティの確立に向けて将来を考えている学生も存在することを示した。一方、学業的達成を非重視できない学生は、病的なモラトリアム状態に固着してアイデンティティの課題を抱えやすい一群となりうることを示唆された(大西, 2016)。

このように、無気力状態には病的レベルにおいて性質の異なるいくつかのサブタイプが存在することが分かっている。しかし、実際にどのような種類があり、如何なる点に相違があるのか、またどのような点において一般的な学生と異なるのかについては、まだ十分に検討されていない。特に、狩野・津川(2011)におけるスチューデント・アバシー的な無気力に関連して、大西(2016)は学業領域固有の知覚された無気力についてカテゴリー分類を試みた。上記のようにアイデンティティ状態や学業的達成の重視に関してカテゴリーごとの差異と、更なる分類の可能性が示された(大西, 2016)。そこで本研究では、無気力についての自覚レ

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

2 東京成徳大学

ベルによっても分類がなされるのではないかと考え、学習への無気力状態とその自覚レベルに基づいてカテゴリー化するための新たな尺度を作成する。

上記の狩野・津川 (2011) の研究から、分析的・否定的な思考傾向と無気力状態の関連が示されている。更に、学習時の不安感について調査した伊藤・神藤 (2003) の研究では、不安が学習の持続性に阻害的な影響を与えていることが分かった。本研究ではこの点に着目し、不安感と分析的・否定的な思考を現状の自身に対する危機感としてまとめ、尺度化する。自身に対する危機感とは、無気力状態への自覚レベルを捉えられる尺度と考えられる。危機感が高いことは狩野・津川 (2011) のとおり、抑うつ的な無気力につながる可能性がある一方、無気力状態への自覚は、逆に病的な無気力への抵抗になることも予想できる。

このような点について検証するため、各カテゴリー間でどのような要因に違いがあるかを検討する。無気力に関連すると考えられる要因として、まず動機づけが挙げられる。西村・河村・櫻井 (2011) は、自己決定理論における自律性の4つの程度、すなわち外的調整、取り入れの調整、同一化的調整、内的調整のうちどの段階にあるかによって、課題に直面した際の取り組み方が異なることを指摘している。同研究では、自律性の程度が高い内的調整よりも、同一化的調整のほうが興味の持てない内容に対して粘り強く取り組む可能性があることを示した。「勉強するのが面白いから」といった内的調整に基づく学習動機づけを持っている生徒が困難な学習内容に直面した際、興味や関心が薄れてしまう場合があるのに対し、学習を行うことの価値を自己のものとして受け入れる同一化調整による学習動機づけを持っている生徒は、興味が持てなくなっても自分のために学習すると考えられる (西村他, 2011)。また、大西 (2016) は、知覚された無気力に影響を与える要因として能動性と受動性を想定した。以上のような調整スタイルは、能動性や受動性とも関連すると考えられる。西村他 (2011) の尺度は大学生向けではないため、安藤 (2005) の作成した学習動機づけ尺度を用いて、各カテゴリー間で学習動機づけの調整スタイルに違いがあるか検討していく。

次に、無気力と関連する要因として、自己効力感が挙げられる。伊藤・神藤 (2003) は自己効力感が高い者ほど能動的に学習に取り組み、学習の持続性が高いことを示した。自己効力感の低さは学習意欲の低下に繋がるため、学生が無気力状態となるひとつの要因であると考えられる。伊藤・神藤 (2003) の尺度は大学生向けではないため、成田・下仲・中里、河合・佐藤・長田 (1995) の作成した特性的自己効力感尺度を用いて、カテゴリーごとの自己効力感の差異について比較していく。

また、学生の無気力状態を測る代表的な尺度である

下山 (1995) のアパシー心理性格尺度の結果とも合わせて検討していく。この尺度は人格障害レベルのアパシーの心理性格的特徴を基にしており、各カテゴリーにおける病的なレベルの無気力の性質を比較、検証できるものと考えられる。

研究 1

目的

大学生の学習に対する無気力感及び危機感を測定する心理尺度を開発する。

方法

調査対象者 関東圏の大学に通う大学生268名 (男性75名, 女性193名) であった。平均年齢は19.33歳 ($SD=1.01$) で、学年は1年生145名, 2年生71名, 3年生46名, 4年生6名であった。

調査時期 2017年10月に実施した。

調査実施の手続き 各大学の授業担当教員に質問紙調査への協力を依頼した。教員には、事前に調査の説明を行った。担当教員と十分に相談し、授業を受講する学生の授業時間に影響が少ない日時を選び、実施した。質問紙を配布した後に、質問紙に添えた文章を口頭で読み上げながら、調査についての説明を行った。①研究の目的、②質問項目には正答はなく、率直に答えること、③心身に影響がないように十分配慮しているが、不快になった場合には回答を中断できること、④自由意志による協力で、非協力の場合でも不利益が生じないこと、⑤協力に同意した場合でも回答の中断、撤回が可能なこと、⑥無記名調査であるので匿名性が保護されること、⑦回答データは厳重に管理し、外部に漏れることがないこと、⑧回答データは統計的に処理され、学会等で発表されること、⑨質問紙の提出をもって、協力への同意とすることを説明した。

質問紙構成 ①フェイスシート 調査対象者の属性 (年齢, 性別, 学年, 学部, 学科) について回答を求めた。②学習への無気力感尺度 学習への無気力を測定するために、新たに作成した尺度である。臨床心理学を専門とする大学院生4名で、学習への無気力や危機感として考えられるものを複数挙げ、KJ法を行った。KJ法の結果から、学習への無気力を測定する項目案を作成した。大学生28名, 大学院生32名を対象に予備調査を行い、項目内容の検討を行った結果、25項目を選定した。項目の妥当性について、臨床心理学を専門とする大学教員1名が確認を行った。25項目について、大学生活での気持ちや行動において、1 (あてはまらない) から5 (あてはまる) の5件法で回答を求めた。

倫理的配慮 本研究の実施にあたり、東京成徳大学大学院心理学研究科研究倫理審査委員会で承認を得た (承認番号17-1-22)。

結果

学習への無気力感尺度の検討 無気力感尺度25項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で分布の偏りが見られた。しかし、得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても無気力感という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでこの段階では項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に、25項目に対して主因子法による因子分析を行った。スクリープロットより4因子以降の変化がなだらかであったこと、そして質問項目のまとまりから3因子を採用した。そこで3因子を仮定して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量 (.35) を示さなかった5項目(「授業中寝てしまう」「自分の力で課題を達成したい」「勉強にはまじめに取り組みたい」「何のために勉強するのかわからない」「単位を取れば成績はいつでもいい)を分析から除外した。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表1に示した。

第一因子は13項目で構成されており、「自分から進んで勉強をしたくない」「勉強するくらいなら他のことをしたい」「できることなら勉強することは避けたい」など、学習に対して積極的な取り組みを避ける内容に高い負荷量を示していた。そこで「学習意欲の低さ」因子と命名した。第二因子は4項目で構成されており、「このままの自分ではいけないと思う」「今の自分を変えたいと思う」「今のような生活を続けることに不安を感じている」など、自分自身や環境を変化させなければいけないという気持ちを含む内容に高い負荷量を示していた。そこで「危機感」因子と命名した。第三因子は3項目で構成されており、「単位を取れなくてもいいやと思う時がある」「単位を落としたとしても、仕方がないと思う」「将来のことは考えないようにしている」という、これからの課題に対する関心の無さを含む内容に高い負荷量を示していた。そこで「無関心傾向」因子と命名した。

各因子に含まれる項目の信頼性を検討したところ、第一因子は $\alpha=.90$ 、第二因子は $\alpha=.75$ と十分な内的整合性が確認された。第三因子は $\alpha=.66$ と一定の内的整合性が確認された。

考察

研究1の目的は、大学生の学習に対する無気力感及び危機感を測定する心理尺度を開発することであった。

Table1 学習への無気力感尺度 (Promax回転後の因子パターン)

	I	II	III
I.学習意欲の低さ($\alpha=.90$)			
5 自分から進んで勉強をしたくない	.76	-.02	.06
6 勉強するくらいなら他のことをしたい	.75	-.02	.00
16 できることなら勉強することは避けたい	.75	.05	.08
24 勉強するのがいやだ	.70	.07	.08
3 レポートは単位をとるために書くものだと感じる	.67	.04	-.34
18 勉強が楽しくない	.67	.09	.00
12 勉強のことを考えたくない	.66	.15	.09
11 卒業さえできれば勉強はどうでもいい	.63	-.15	.14
2 勉強はテストで点数を取るためにするものだと感じる	.61	-.15	-.27
21 なるべく楽をして単位を取りたい	.55	.07	-.06
20 学業に積極的に取り組みたい気持ちがある(R)	-.52	.21	-.15
13 可能な限り代返をお願いしたい	.46	.01	.00
19 家では勉強したくない	.45	.04	.14
II.危機感($\alpha=.75$)			
17 このままの自分ではいけないと思う	-.04	.85	.02
22 今の自分を変えたいと思う	-.13	.74	-.10
14 今のような生活を続けることに不安を感じている	.08	.56	.00
7 今の自分はなまけていると思う	.14	.51	.12
III.無関心傾向($\alpha=.66$)			
23 単位を取れなくてもいいやと思う時がある	-.16	-.02	.83
4 単位を落としたとしても、仕方がないと思う	-.02	.02	.62
25 将来のことは考えないようにしている	.16	.01	.45
因子間相関			
I	—	.27	.49
II		—	.15
III			—

新たに作成した「学習への無気力感尺度」を用いて、大学生を対象とした調査を実施した結果、20項目において「学習意欲の低さ」「危機感」「無関心傾向」の3因子が抽出された。これは大西（2016）の学業領域固有の無気力状態測定尺度（PASS-A）が3因子構造であることと重なる結果と考えられる。

「学習意欲の低さ」因子は、大学生活において大きな部分を占める学業に対する嫌悪や意欲の低さを表していると推測される。そのため、この因子は下山（1995）の意欲低下領域尺度における「学業意欲低下」に該当すると考えられる。また、大西（2016）の尺度における「労力回避」とも重なることが想定される。

「危機感」因子は、自身の行動や態度に満足していないことを示していると考えられる。これは自分なりの無気力感を自覚している状態であるとも想定される。大西（2016）の尺度における「葛藤」に近いものと推測されるが、大西の「葛藤」因子は学業に対する葛藤的な無気力感を表すのに対し、「危機感」因子はより広く現在の自分の行動や態度に対する葛藤から生まれる危機感を表している点で相違がある。また、狩野・津川（2011）は抑うつ的な無気力群において「否定的に考え込む傾向」「分析的に考え込む傾向」があると指摘している。無気力状態の中でも抑うつ的な症状のある群では、自分自身や抱えている問題について深く考え込みやすいことが示されており、自分自身の状態への自覚という点で、本研究における危機感との関連が考えられる。

「無関心傾向」因子は、大学卒業に必須であり、学生にとって本来関心を持って取り組むべき課題である単位取得や、将来の進路といった問題について関心をもたず、選択的に退却している状態を表していると推測される。この因子は、上記のような課題を達成しようという意欲が低い、というよりは、「課題にそもそも関心がない」という課題に取り組む以前の問題を表していると考えられるため、大西（2016）の尺度における課題達成への低意欲状態を示す「達成非重視」とは様相が異なると考えられる。また、この因子は現実や将来についての検討を行う能力の低さにもつながることが想定される。下山（1996）の整理したスチューデント・アパシー概念の中においても、より重症タイプのスチューデント・アパシーの場合は現実検討力の水準が低いことが指摘されている。他の2因子と比較してやや α 係数の値が小さいのは、こうした現実検討に関する項目数が質問紙作成時点で少なかったことによる影響と考えられる。

因子間相関について、「学習意欲の低さ」因子と「無関心傾向」因子との相関は.49と中程度であったが、それと比較して、「危機感」因子と他の2因子との相関は.30以下と低かった。各因子の示す内容からも、それぞれが異なる性質や傾向を表していると想定され

る。よって、本尺度を用いて、各下位尺度の高低から群分けを行うことで無気力感について類型化することができると考えられる。

研究2

目的

研究1で作成した学習への無気力感尺度と、他の無気力に関する要因との関連を検討する。

方法

調査対象者 関東圏の大学に通う大学生268名（男性75名、女性193名）であった。平均年齢は19.33歳（SD=1.01）で、学年は1年生145名、2年生71名、3年生46名、4年生6名であった。

調査時期 研究1と同時に実施した。

調査実施手続き 研究1と同様の手続きをとった。

質問紙構成 ①フェイスシート 調査対象者の属性（年齢、性別、学年、学部、学科）について回答を求めた。

②学習への無気力感尺度 研究1で作成した尺度を用いた。全25項目で、下位尺度は学習意欲の低さ13項目、危機感4項目、無関心傾向3項目からなる。なお、研究1の結果を受けて、「授業中寝てしまう」「自分の力で課題を達成したい」「勉強にはまじめに取り組みたい」「何のために勉強するのかわからない」「単位を取れば成績はどうでもいい」の5項目を除外して分析を行った。

③アパシー心理性格尺度 下山（1995）が作成したアパシー傾向を測定する尺度を用いた。下位尺度は、張りのなさ、自分のなさ、味気なさであった。項目数は15項目で、1（あてはまらない）から5（あてはまる）の5件法で回答を求めた。

④特性的自己効力感尺度 成田・下仲・中里、河合・佐藤・長田（1995）が作成した特性的自己効力感を測定する尺度を用いた。項目数は23項目で、1（そう思わない）から5（そう思う）の5件法で回答を求めた。

⑤学習動機づけ尺度 安藤（2005）が作成した学習動機づけを測定する尺度を用いた。下位尺度は、外的調整、取り入的調整、同一化的調整、内発的調整であった。項目数は14項目で、1（ぜんぜんあてはまらない）から5（とてもあてはまる）の5件法で回答を求めた。

結果

尺度の信頼性および尺度得点の算出 学習への無気力各下位尺度について、内的一貫性の検討を行ったところ、学習意欲の低さ（ $\alpha = .90$ ）、危機感（ $\alpha = .75$ ）、無関心傾向（ $\alpha = .66$ ）であった。各下位尺度について、十分な信頼性が確認されたため、各項目を合計し、各下位尺度得点を算出した。

アパシー心理性格各下位尺度について、内的一貫

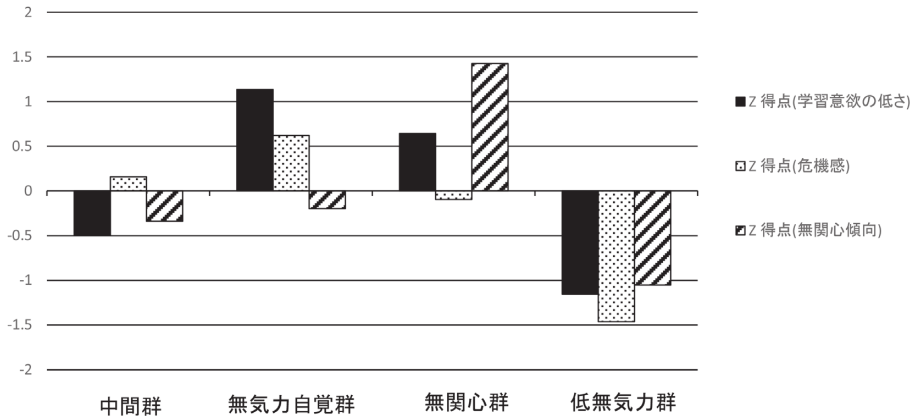


Fig1 階層的クラスタ分析の結果

性の検討を行ったところ、張りのなさ ($\alpha = .71$), 自分のなさ ($\alpha = .67$) 味気のない ($\alpha = .71$) であった。各下位尺度について、十分な信頼性が確認されたため、各項目を合計し、各下位尺度得点を算出した。

特性的自己効力感尺度について、内的一貫性の検討を行ったところ、十分な信頼性 ($\alpha = .86$) が確認されたため、各項目を合計し、尺度得点を算出した。

学習動機づけ各下位尺度について、内的一貫性の検討を行ったところ、同一化的調整 ($\alpha = .84$), 内発的調整 ($\alpha = .73$), 取り入れ的調整 ($\alpha = .57$), 外的調整 ($\alpha = .76$) であった。同一化的調整, 内発的調整, 外的調整について、十分な信頼性が確認されたため、各項目を合計し、各下位尺度得点を算出した。取り入れ的調整については、信頼性係数が十分でなかったが、先行研究にない、下位尺度得点を算出した。

無気力状態のカテゴリー化の検討 学習意欲の低さ, 危機感, 無関心傾向についてZ得点を算出し、階層的クラスタ分析を行った結果、Fig.1に示す4つのクラスターが得られた。第一クラスターは、学習意欲が高く、危機感が平均的で、無関心傾向が低い特徴を有することから、「中間群」と命名した。第二クラスターは、

学習の意欲が低く、危機感が高く、無関心傾向が平均的である特徴を有することから、「無気力自覚群」と命名した。第三クラスターは、学習の意欲が低く、危機感が平均的で、無関心傾向が高い特徴を有することから、「無関心群」と命名した。そして第四クラスターは、学習意欲が高く、危機感が低く、無関心傾向も低い特徴を有することから、「低無気力群」と命名した。Z得点化前の平均値と標準偏差はTable.2に示す。

各因子におけるクラスター間の差の検討 各因子を構成する項目の評定値の合計を従属変数とし、クラスター間で一要因分散分析をおこなった。平均値と標準偏差, F値, 多重比較の結果をTable.3に示した。

アパシー心理性格尺度各下位尺度について、1要因分散分析を行った結果、各下位尺度でF値が有意であった。多重比較検定の結果、低無気力群は他の群と比べて、張りのなさ, 自分のなさ, 味気のないが有意に低かった。無気力自覚群は、張りのなさとの自分のなさが中間群と比べて有意に高かった。無関心群は、自分のなさと味気のないが中間群と比べて有意に高かった。

特性的自己効力感尺度について、1要因分散分析を

Table2 各クラスターにおける標準化前の平均値と標準偏差

	1 中間群 (n = 121)		2 無気力自覚群 (n = 51)		3 無関心群 (n = 58)		4 低無気力群 (n = 31)		F値	多重比較検定
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
学習意欲の低さ	2.62	0.45	3.90	0.39	3.51	0.55	2.10	0.65	139.05***	4<1,2,3*** 1<2,3*** 3<2***
危機感	3.92	0.66	4.31	0.76	3.70	0.66	2.53	0.76	45.01***	4<1,2,3*** 3<2*** 1<2**
無関心傾向	1.77	0.51	1.90	0.58	3.33	0.62	1.14	0.22	155.84***	4<1,2,3*** 1<3*** 2<3***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

Table3 各クラスにおける各下位尺度の平均値と標準偏差

	1 中間群 (n = 121)		2 無気力自覚群 (n = 51)		3 無関心群 (n = 58)		4 低無気力群 (n = 31)		F値	多重比較検定
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
アパシー心理性格尺度										
張りのなさ	16.60	3.93	18.73	3.41	17.09	3.90	11.00	3.56	28.14*	4<1,2,3* 1<2*
自分のなさ	14.93	3.81	17.33	3.97	17.22	3.31	9.97	2.88	33.26*	4<1,2,3* 1<2,3*
味気のない	10.55	3.36	11.80	4.46	12.72	3.59	7.81	2.76	13.97*	4<1,2,3* 1<3*
特性的自己効力感	69.29	11.55	60.78	11.15	61.21	12.17	75.97	12.30	16.61*	2<1,4* 3<1,4* 1<4*
学習動機づけ尺度										
同一化的調整	21.00	3.26	19.69	4.25	18.59	3.94	22.19	3.66	8.89*	3<1,4* 2<4*
内発的調整	10.51	2.19	7.80	2.79	9.16	2.54	10.94	3.01	17.49*	2<1,3,4* 3<1,4*
取り入的調整	10.34	2.22	9.73	2.88	9.34	2.47	10.90	3.13	3.47*	3<4*
外的調整	5.49	2.23	7.47	3.28	6.90	2.67	4.55	2.11	12.94*	4<2,3* 1<2,3*

* p<.05

行った結果、F値が有意であった。多重比較検定の結果、低無気力群は、他の群と比べて自己効力感が有意に高かった。無気力自覚群と無関心群は、ともに中間群と比べて自己効力感が有意に低かった。

学習動機づけ尺度各下位尺度について、1要因分散分析を行った結果、各下位尺度でF値が有意であった。多重比較検定の結果、低無気力群は、無気力自覚群、無関心群と比べて同一化的調整、内発的調整が有意に高く、外的調整が有意に低かった。また、無関心群と比べて取り入的調整が有意に高かった。無気力自覚群は、中間群、無関心群と比べて内発的調整が有意に低く、中間群と比べて外的調整が有意に高かった。無関心群は、中間群と比べて同一化的調整、内発的調整が有意に低く、外的調整が有意に高かった。

考察

本研究の目的は、学習への無気力状態に基づいてカテゴリー化するため、学習への無気力状態と現状に対する危機感を測定できる尺度を新たに作成し、各カテゴリーがどのような要因と関連し、如何なる差異が見られるかを検討することであった。作成した尺度の分析を行ったところ、「学習意欲の低さ」、「危機感」、「無関心傾向」の3因子が抽出された。続けて、上記の3因子によるクラス分析を行った。その結果、平均的な傾向を示す「中間群」、低い学習意欲、高い危機感、平均的な無関心傾向を示す「無気力自覚群」、低い学習意欲、平均的な危機感、高い無関心傾向を示す「無

関心群」、高い学習意欲、低い危機感、低い無関心傾向を示す「低無気力群」の4群に分類された。

4群の中で、「無気力自覚群」と「無関心群」は、学習意欲の低さという点で共通している。一方で、危機感と無関心傾向の点では相違がある。「無気力自覚群」は、危機感が高く、無関心傾向が平均的であることから、学習意欲の低さを自覚し、問題意識を持っていると考えられる。それに対して、「無関心群」においては、危機感はある範囲に収まっており、無関心傾向が高いことから、学習意欲の低さに「無気力自覚群」ほど自覚的ではなく、学業や将来に対する関心が薄れている状態だと推測される。先行研究において、狩野・津川(2011)は、抑うつ的な状況に置かれたときに分析的・否定的に考え込む傾向が高いほど抑うつの無気力に陥りやすく、分析的・否定的に考え込む傾向が低いほどスチューデント・アパシーの無気力状態に陥りやすいとして両者を区別した。本研究における危機感と無関心傾向は、自分自身やこれから先のことについて考える傾向を表しており、狩野・津川(2011)の研究における「分析的・否定的に考え込む傾向」をより限定的・具体的に示したものであると考えられる。よって、「分析的・否定的に考え込む傾向」と同様に、抑うつの無気力とスチューデント・アパシー的無気力を分ける要因であると推測されることから、「無気力自覚群」が抑うつの無気力に相当し「無関心群」がスチューデント・アパシー的無気力に相当すると考えられる。「低無気力群」については、学習意欲の低下を

感じておらず、学業に対して関心を持っているため、大学生活に適応していると考えられる。危機感も低く、このままの自分で良いと考えており、自己受容的であると推測される。

下山(1995)のアパシー心理性格尺度の各カテゴリ間の分散分析による比較では、3因子とも「中間群」、「低無気力群」については得点が低く、「無気力自覚群」、「無関心群」では得点が高かった。この結果から、「無気力自覚群」、「無関心群」の2群でアパシー傾向が高いことが分かる。また、特性的自己効力感についても、「無気力自覚群」、「無関心群」は「中間群」、「低無気力群」に比べて低いという結果になった。この結果は、自己効力感の低さは学習意欲の低下に繋がるため、学生が無気力状態となるひとつの要因であるという仮説を支持するものである。また、伊藤・神藤(2003)による、自己効力感が高い者ほど能動的に学習に取り組み、学習の持続性が高いという先行研究の結果とも一致する。

アパシー心理性格尺度と特性的自己効力感尺度において、「無気力自覚群」と「無関心群」に有意な差は見られなかった。よって、「無気力自覚群」と「無関心群」の間で無気力の性質自体に大きな差異はないと考えられる。その一方、今回新たに作成した学習への無気力感尺度においては、「学習意欲の低さ」「危機感」「無関心傾向」の3因子全てで「無気力自覚群」と「無関心群」に有意な差が見られた。「無気力自覚群」は危機感が有意に高く、「無関心群」は無関心傾向が有意に高かったことから、無気力な自分をどのように認知しているか、これからどうすべきか考えているかという点に違いがあると考えられる。「無関心群」と比較して「無気力自覚群」で学習意欲が低かったのは、自分の無気力に自覚的であったため、質問紙への回答の際に学習意欲がより低いと自身を評価したことによると推測される。これらの結果から、各々の抱える無気力の特徴を見る際に、「どのような無気力か」という無気力の性質自体を見るだけでは捉えることのできない要因があり、自身の無気力に関してどのように思っているかという認知の面に焦点を当てることが重要であると考えられる。

学習動機づけ尺度(安藤, 2005)については、自律性の高い動機づけである内発的調整と同一化的調整において、「無気力自覚群」と「無関心群」が「中間群」と「低無気力群」に比べて低かった。自律性の低い動機づけである外的調整においては「無気力自覚群」と「無関心群」が「中間群」と「低無気力群」に比べて高いという結果となった。このことから、学習意欲が低い群は、自律的な学習動機づけが低く、反対に他律的な学習動機づけが高いことが分かる。また、「中間群」と「低無気力群」には有意差が見られなかったことから、動機づけの自律性は学習意欲の高さよりも、学習

意欲の低さに影響を与える要因であると考えられる。

「内発的調整」においては「無関心群」の方が「無気力自覚群」に比べて高いという結果が得られた。西村他(2011)は、「勉強するのが面白いから」といった内的調整に基づく学習動機づけを持っている生徒が困難な学習内容に直面した際、興味や関心が薄れてしまう場合があるとしている。このことから、「無関心群」は「無気力自覚群」よりも、勉強に対する面白さや楽しさを求めており、それが得られないために学習意欲が低下していると考えられる。対して「無気力自覚群」は、「無関心群」より他律的な学習動機づけを有しており、罰への恐れや義務感から学習を行っているため、高い「危機感」を持っている可能性がある。

今後の課題

本研究では、新しく作成した尺度を使用し、大学生を無気力に基づいて4つのカテゴリに分類した。また、4群間でどのような要因に差異があるか、他の尺度を使用して調べた。その結果、「無気力自覚群」「無関心群」と他の2群の間では有意差が見られた。一方で、「無気力自覚群」と「無関心群」の間には、学習への無気力感尺度の3因子の他は、学習動機づけ尺度の内発的調整のみでしか有意な差が見られなかった。これは、本研究で使用する尺度を選択する際に、無気力の性質の違いからカテゴリ間の差異を探ろうとしていたが、実際には無気力の性質よりも自身の無気力についてどのように認知しているかがカテゴリ間の差異に影響を与えていたからであると考えられる。今後の研究では、無気力への自身の認知に焦点を当て、カテゴリ間の差異を検討していくことが必要であると考えられる。具体的には、「無気力自覚群」は「無関心群」に比べ、自身の無気力へのメタ認知が進んだ状態であると考えられるため、今回作成した尺度とメタ認知の程度を調べる尺度を併せて調査することでカテゴリ間の差異を示すことができると考えられる。

引用文献

- 安藤史高(2005). 大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連 一宮女子大学紀要, 44, 91-99.
- 伊藤崇達・神藤貴昭(2003). 自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証—認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して— 日本教育工学雑誌, 27, 377-385.
- 大西恭子(2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究, 64, 340-351.
- 狩野武道・津川律子(2011). 大学生における無気力の分類とその特徴 教育心理学研究, 59, 168-178.

- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, *43*, 145-155.
- 下山晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, *44*, 350-363.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, *43*, 306-314.
- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男 (2011). 自律的な学習動機づけとメタ認知の方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?— 教育心理学研究, *59*, 77-87.

—2018.1.28受稿, 2018.3.2受理—

Perceived apathy states in academic and a sense of crisis in undergraduate students

Ai SOMA (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Tsubasa ITO (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kazuki UCHIYAMA (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kosuke MURAKAMI (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Toshihiko SENSUI (*Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this study was to develop a new scale for categorizing perceived apathy states in academic in university students, and to examine differences among four apathy states' groups. Total of 267 undergraduate students completed a questionnaire. Exploratory factor analysis indicated that the apathy scale composed of 20 items with three factors, "low motivation in academic", "sense of crisis", and "feeling of abandonment". A hierarchical cluster analysis using the three factors divided the participants into four groups, "middle group" which showed high motivation in academic, low sense of crisis and low feeling of abandonment, "apathy awareness group" which showed low motivation in academic, high sense of crisis, average of feeling of abandonment, "abandonment group" which showed low motivation in academic, average sense of crisis, high feeling of abandonment, and "non-apathetic group" which showed high motivation in academic, low sense of crisis and low feeling of abandonment, were exacted. "Apathy awareness group" showed higher "sense of crisis" and lower "feeling of abandonment" than "abandonment group". One-way ANOVA revealed that the "apathy awareness group" and "abandonment group" were significantly higher score of apathy mentality scale than the other two groups. In generalized self-efficacy scale, "apathy awareness group" and "abandonment group" were significantly lower than the other two groups. In the learning motivation scale, "apathy awareness group" and "abandonment group" showed significantly lower "identity adjustment" and "internal adjustment", and significantly higher "external adjustment" than the other two groups. Also, "abandonment group" showed significantly higher "internal adjustment" than "apathy awareness group". These results suggest that "apathy awareness group" and "abandonment group" has the same factors (low self-efficacy/learning motivation) causing student's apathy. Moreover, the result implied that the difference between "apathy awareness group" and "abandonment group" is the degree of cognition for apathy state and internal motivation.

Key words: student's apathy, apathy in academic, sense of crisis, learning motivation

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2018, Vol. 18, pp. 158-166